



Title	日本における多発性硬化症病者の経験に関する研究
Author(s)	森谷, 利香
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49846
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【9】

氏 名	もり 谷 り 香
博士の専攻分野の名称	博 士 (看護学)
学 位 記 番 号	第 2 2 8 2 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科保健学専攻
学 位 論 文 名	日本における多発性硬化症病者の経験に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 鈴木 純恵 (副査) 教 授 梅下 浩司 教 授 清水 安子

論 文 内 容 の 要 旨

1. 研究背景

多発性硬化症(Multiple Sclerosis; 以下MSとする)は、中枢神経系の炎症性脱髄性疾患であり、再発と寛解を繰り返す原因不明の難病である。MSに対する根治療法がない今、病者のQOLを維持・向上を図るうえで、生活を支える看護の役割は大きい。そのためには、まずMS病者の経験の理解が重要である。これらに関する先行研究が行われているが、病者を理解する概念間の関係性や枠組みについては明らかにされてこなかった。これらを明らかにすることは、病者の行動の予測と説明に有効であり、またその経験の全体像の理解を踏まえた支援に有用と考えた。さらに本研究は結果を、これまでの欧米の関連研究と比較検討することで、本邦との文化の相違による病者の経験の相違を明らかにし、本邦で共有されている価値観や生活様式に合わせた支援を提言するものである。特にMSの場合、欧米と本邦では有病率や病変分布、及び経過の仕方が異なるため、日本の病者に特有の経験が存在すると推測できるため、これらを明らかにした上で看護支援を検討することが必要である。

2. 研究目的

- 1) 日本のMS病者の経験を表す概念の特性、及びそれらの関係性を明らかにする。
- 2) 1)より、日本のMS病者の経験を踏まえて、看護支援の方向性について示唆を得る。

3. 用語の定義

「経験」とは、個人と個人を取り巻くあらゆる環境との関係の中で、知識や技能をもって、客観的なものとして蓄積されていく内容である。そして環境とは、物理的環境だけではなく、家族や職場での人間関係、及び日本人としての価値観や信念などの文化的背景を含むものである。

4. 研究方法

質的研究法であるGrounded Theory Approachを用いた。参加者の選定には理論的サンプリングにより行い、データ収集と分析は持続比較分析を用いた。その具体は、データ収集と分析をらせん的に進め、まだ見出されていない概念が網羅されるよう、対象の属性を変えながら、新たな参加者に依頼し、概念の飽和化に達するまで行うというものである。このようにして得られたデータを、意味内容の類似性と差異性により分類と抽象化を繰り返し、コア・カテゴリーを生成した。分析の信用性はLincoln&Gubaの基準に則って確保した。

5. 結果

研究参加者は17名であった。データ分析によって、1422のコードから、151のサブカテゴリー、33のカテゴリー、7つのコア・カテゴリー、すなわち、MS 病者の経験を構成する中核的概念が生成された。以下では、各コア・カテゴリーの特性と、それらの関係性について時間的経過に沿って述べる。

まず病者は発症から診断までに、曖昧な症状や診断の困難さによる《1. 初発症状から診断までの戸惑い》を持ち、診断直後には《2. 予後に対する自分なりの捉え方》をしていた。

次いで、《3. 症状による生活の乱れと気持ちの揺れ》があり、MSの多彩な機能障害が、日常生活だけではなく家庭・職業生活を維持困難にする内容を示した。これには、従来の職務能力を発揮できないための自己否定や、家庭内役割が果せない罪悪感があり、また多くの女性が、主婦役割ができないことによる自分らしさの混乱を経験していた。《4. 生活の再建と制御困難感》は、生活の乱れへの対処を示し、不安定な症状にその都度対処することや、周囲の負荷と迷惑を回避することで社会生活を維持する姿があると同時に、生活を従前通りにする限界も経験していた。そして再発してからは《5. 再発と治療効果が確かでないための予測困難》があった。これは、再発や治療効果の不確実性によって、将来の見通しが立てられず、気持ちの拠り所がない経験であった。これら3～5のカテゴリーの関係性は、予測困難による不確実性を震源として生じる、生活の乱れ、及び生活の再建という、間隔も大きさも様態も不規則な波で表現できた。また一旦再建された生活も、次の再発によって崩され、更なる再建を要する経験の反復は、波の揺らぎの様相を呈し、これらを通して病者の生活はその都度変えることを強いられていた。

そして、《6. 従来の自分へのこだわりと新たな自分への獲得》は、病者の自己概念の変化を表し、健常者から障害者の自己へと変遷する様子を示した。病者の健常者ではないという認識には、再発や病状の変化の他に、MSが周囲に理解されにくいことの気付きも影響していた。また自己概念の変化と、前述の生活再建の反復の経験とが、相互に影響し合い、病者の内部で調和が取れたときに《7. MS病者として自分らしく生きる》経験が見出せた。

6. 考察

概念の特性と関係性、及び日本の病者の特徴という2つの視点から看護支援を検討する。まず、本研究で創出された概念は、診断までの戸惑いや衝撃、診断後の生活や気持ちの乱れ、及び新たな生活再建、そして、再発後の不確実性などであった。このような概念は、過去の研究結果と類似しており、本研究結果を支持するものである。次に、概念間の関係では、次の2つの特徴があり、いずれも不確実性の影響を受けていた。一つ目は、病者の生活再建や生活の乱れに、不確実性が先行する構造である。二つ目は、再建の内容が再発のたびに異なり、これによって病者の生活が変化することである。他の神経難病でも、生活の乱れや再建はあるが、不確実性が先行することや、MSほどに経過の多彩さに翻弄されることは殆どない。従って、MS病者の支援では、単に生活の乱れに対応した生活再建を行うのではなく、それらに先立つ不確実性をも包含した視点を持ち、継続的に支援する必要性が新たに示唆された。さらに病者の前向きな療養生活のために、生活再建と自己概念との調和が必要であることが明らかにになり、この両面を並行して支援することが重要である。

そして、日本のMS病者の特徴では、欧米に比べて有病率が低く、視力障害と脊髄障害を来す可能性が高い。これらから、日本のMS病者が有する症状の他者からのわかりにくさと、周囲からの理解の乏しさがあり、病者が公表せずに困難を抱えこみながら、社会生活を継続していた。他にも、他者に迷惑をかけないようにすることや、従前の役割と関係性を乱さないようにする、日本人に特徴的な場の倫理を尊重する対処があった。従って、病者の社会生活の送り方や、周囲との関係性、及び役割への葛藤に対する配慮が必要である。

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本の多発性硬化症 (Multiple Sclerosis;以下MS) 病者の経験を構成する概念を明らかにし、看護支援についての示唆を得ることを目的とした研究である。方法は、質的研究方法の一つであるグラウンデッド・セオリー・アプローチを用い、病者17名に対する半構造化面接によって得られたデータを分析した。その結果、《初発症状から診断までの戸惑い》、《予後に対する自分なりの捉え方》、《再発と治療効果が確かでないための予測困難》、《症状による生活の乱れと気持ちの揺らぎ》、《生活の再建と制御困難感》、《従来の自分へのこだわりと新たな自分への獲得》、《MS病者として自分らしく生きる》の7つの概念が創出された。これらの関係性から、生活の乱れに不確実性が先行することや、不確実性を伴う再建の過程の反復が病者の経験を変化させることが明らかとなった。さらに、生活再建と自己概念の折り合いによって前向きに生きることが明らかとなり、生活再建と並行した精神面への支援が有効と考えられた。さらに、日本のMS病者の特徴として、周囲との関係や役割を踏まえた対処スタイルがあり、対処しきれない場合に見られる困難の抱え込みなどへの支援が課題として示唆された。

これまでのMSの経験に関する研究は、主に欧米において行われており、概念間の関係性については議論されてこなかった。本研究によって、これらの関係性が新たに明らかになったことは、

病者の行動の予測と説明に有効であり、またその経験の全体像の理解を踏まえた支援に有用と言える。加えて、日本において共有されている心理社会的特性やMSという病のイメージといった文化的背景を視野に入れたことで、日本における価値観や信念、あるいは生活様式に合わせた看護支援を提言でき、実効のある看護支援に結びつくものと考えられる。特にMSの場合、欧米と日本で、その有病率や病変分布、及び経過の仕方が異なるために、日本独自の研究結果は重要である。

さらに本研究は、MS病者のQOLの構成概念やその尺度開発のための基礎資料となるものである。同様に、他の神経難病病者及び、再発と寛解を反復する病を持つ者の経験を理解する上での参考資料となるものと考えられ、今後の研究への発展性が期待される。

以上のことから、本研究は博士号授与に値するものである。